

実習報告（異校種実習）

## 自覚的な学びにつながる幼児期の「遊び」の理解

井手 瑞恵（授業実践探究コース：現職教員）

### 【探究実習のテーマと設定の理由】

大学院2年間を通したテーマを「児童の自覚的な学びの育成についての実践研究～アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の在り方について～」としている。現任校の唐津市立鏡山小学校では、平成25年度より3年間、上越教育大学の西川純氏を講師に迎え、『学び合い』の考えをもとにした授業づくりを校内研究として行ってきた。その結果、児童の意欲の向上や友達同士の関わり方の改善などの一部の効果は見られたものの、学力の向上に関しては、十分な成果は見られなかった。その原因の一つに、活動が中心となってしまい、深い理解に課題があることが考えられる。

無藤(2011)は、幼児教育が小学校以上の教育の基盤を作ると述べ、「幼児教育の原理は無自覚の学びにある」「小学校教育の原理は自覚的な学びにある」とし、それぞれの教育の違いについて示している。また、幼児教育は「学びの基礎力」を育てることも強調した。

そこで、異校種実習（以後、実習とする）では、幼児と一緒に活動することで、幼児が遊びを通してどのように育っているか、教育目標やエピソード記録等の分析を通して「無自覚の学び」の実態について検証する。また、幼児の遊びを記録し教師としての「子どもを見る目」を磨くことにより、幼稚園と小学校との接続の視点を具体化することを目的とした。

### 【探究実習の研究目標】

1. 幼児期の「遊び」を通して育まれる自律性の実態を探る。
2. 幼児が遊び込むための環境設定や教師の役割について把握する。

### 【探究実習の概要】

佐賀大学教育学部附属幼稚園（以下、附属幼稚園とする）には、3歳から5歳まで計71名の幼児が在籍している。その中の4歳児クラス（男児11名女児18名 計29名）を対象に4週間の実習を行った。実習では、保育参加や保育補助などを通して以下の3つの視点から研究目標に迫りたいと考えた。

#### 1. 附属幼稚園の実態把握

事前指導や日々の生活の中で教育目標に沿ってどのような実践が行われているかを把握するために他の幼稚園と教育目標や生活時間を比較した。その結果、附属幼稚園では、「遊び」が教育の骨格となっており、そのための時間が十分に確保されていることがわかった。例えば、子どもの生活では、登園するとすぐに、自分の荷物を片づけてそれぞれの遊びを始めていた。また、降園時間以外は時間の設定が明確に決まっておらず、子どもの実態に応じて活動時間が設定されていた。

#### 2. 幼児の実態把握と分析

幼児の実態把握のため、保育者として幼児の活動に参加し幼児との関係性を築きながら遊びを観察した。さらに、観察したことをエピソード記録や保育マップにまとめ、遊びを分析した。その結果、子ども達は毎日園内で楽しく遊んだり、時には友だちと意見をぶつけ合ったりする中で、人と関わる力や自分の気持ちを言葉で表現する力など幼稚園要領でねらいとされている内容を、意識せずに学んでいることがより明らかとなった。6事例挙げたうちの1事例を一部簡略化して示す。

○「タイヤロープ遊び」にて：A子とB男C男の3人が遊んでいると、もも組（年少）のD子がや

ってきた。D子がこわごわタイヤに乗る姿を見て、A子とB男がスタート地点のビールケースを自分からそっと1段外して低くしていた。「どうして外したの？」と聞くと「まだ小さいけんこわいやろ？」と答えた。しばらくするとD子は自分だけでタイヤに乗ることができた。この事例では、B男自身の前日の怖かった経験を思い出し、そっとビールケースを下ろす行為に至ったと思われる。タイヤロープで体を動かす「遊び」の中にも、友だちとのかかわりを深め、相手を思いやり出来ないことに挑戦したりすることで、豊かな感性や探究心が育まれているといえる。

また、ヴィゴツキーの「最近接発達領域」の理論や矢野智司の「溶解体験」の考え方を基に幼児期の「遊び」の意義について考察した。その結果、子ども達は、友だちや保育者との関わりの中で、日々成長していることや「溶解体験」を通して、生き生きとした現代に生きていることを実感できること、さらに、人間として成長していくためには、有能性と生命性の両方が必要であることがわかった。

### 3. 教師の役割の把握

幼児が遊び込む（能動的に遊びに取り組む）ための保育者の役割を、日々の保育の様子を観察したり保育案や保育マップを作成したりして把握した。その結果、環境を整えたり教材を準備したりする点では小学校と同じであったが、その目的に違いがあることがわかった。例えば、小学校教師は、その日の授業の目標を全ての子どもが到達できることを目的にしているが、附属幼稚園では幼児の主体性を尊重しているため、教師の意図する活動があったとしても、幼児の活動に即して計画を変更し、子どもがより生き生きと充実した活動ができることを目的としていた。

#### 【探究実習の成果と課題】

探究実習で行った研究と併せてその他感じた成果と課題は次の通りである。

#### 1. 成果

- (1) 「遊び」を通して行われる教育の理解：幼児教育は「遊び」を通して行われる教育である。附属幼稚園でも、保育者は「遊び」の内容を教えるのではなく、「遊び」の中にある子どもの成長に視点を置いていることがわかった。それに対して、小学校の教師は、「学習」の内容や方法にばかり気をとられ、学習内容の定着に終始していたのではないかと気付かされた。学習を通してどのような力を育みたいかという児童の成長を見つめる視点と視野の重要性にも気付くことができた。
- (2) 子どもを見る目の変容：これまで、1年生は小学校で一番年少者であり、一つ一つ教えてあげなければならない存在であった。しかし、幼稚園の年長組の子ども達が話し合いの中で自分の意見を述べたり、折り合いをつけたりする姿から、1年生に対して過小評価し、子どもが持つ能力や可能性を活かしきれていなかったのではないかと考える。幼稚園の子ども達だけでなく、小学校の低学年の児童に対する見方も変容するなど今後の教育の在り方についての示唆を得ることができた。

#### 2. 課題

- (1) 校区にある幼稚園・保育園の教育方針の理解の必要性：円滑な幼小接続を行うためには、現任教へ入学する10以上の幼稚園・保育園の教育方針を理解する必要がある。しかし、それぞれの園でどのような教育がなされているかは把握できていない現状にある。中には、縦割り保育を行っている保育園もあるので、それぞれの良質な教育方針を小学校の教育に取り入れていきたい。
- (2) 「自覚的な学び」につながる授業の開発：幼稚園での遊びを通した「無自覚の学び」を受けて、小学校での「自覚的な学び」についての研究を進めたい。子ども達に学習の見通しをもたせたり、振り返りを充実させたりして児童が自らの学びを自覚できる場をつくること、活動だけにとどまらず深い学びができる協同的な学びの在り方を探ることなど「自覚的な学び」が可能となる授業の開発について実践を通して深めていきたい。